様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ４ 月 ３０ 日現在

機関番号：４４２０２
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2013～2014
課題番号：２５８８４０９１

研究課題名（和文）サルデーニャ語の動詞における形態統語論の通時的研究

研究課題名（英文）A diachronic study of Sardinian verbal morphosyntax

研究代表者
金澤　雄介（Kanazawa, Yusuke）

滋賀短期大学・その他部局等・講師

研究者番号：７０７１３２８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：期間の前半は、Tobler-Mussafia の法則の「改訂版」によって、古サルデーニャ語の定動詞節のクリティック位置の体系的な記述を試みた。さらに、古サルデーニャ語には現代サルデーニャ語と同じ位置に現れるクリティックがあることに対して、古サルデーニャ語では Tobler-Mussafia の法則の消失がすでに開始していたと考え、クリティックの位置の通時的変化について基礎的な考察を加えた。
期間の後半は、古サルデーニャ語におけるクリティックの重複が生じる条件についての分析をおこなった。その結果、クリティックの重複は、目的語の意味的特徴のみならず、目的語のトピック性が深く関わっていることを示した。

研究成果の概要（英文）：In the first year I provided a systematic description about the position of clitics in finite clauses in Old Sardinian by means of a "revised version" of the Tobler-Mussafia's Law. And as for the exceptional cases, in which clitics appear in the same position as in Modern Sardinian, I gave preliminary consideration to the diachronic change of the clitic position, assuming that the demise of the Tobler-Mussafia's Law has already begun.
In the second year I examined the conditions under which the clitic doubling occurred in Old Sardinian. As a consequence, I claimed that the clitic doubling was intimately involved not only with semantic properties of the objects, but also with their topicality.

研究分野：言語学

キーワード：言語学　サルデーニャ語　ロマンス諸語　歴史言語学　クリティック　情報構造　Tobler-Mussafia の法則　文献学

１．研究開始当初の背景

(1) サルデーニャ語は、イタリアのサルデーニャ島で話されるロマンス諸語の 1 つである。サルデーニャ語は他のロマンス諸語と比較して、その共通の祖先であるラテン語の特徴をよく保存している。ゆえにサルデーニャ語の歴史についての研究は、他のロマンス諸語の記録以前の言語状態、あるいはロマンス諸語とラテン語の間に想定された言語である俗ラテン語の実態を知るという意味でも、極めて重要な位置を占めるといえる。しかしながらサルデーニャ語の歴史については、まだ解明すべき点が多々残されており、他のロマンス諸語との比較・対照研究をおこなうにいたっていない。このような現状のもと、申請者はサルデーニャ語の音韻論、名詞および動詞形態論の通時的変化についての研究を推進してきた。動詞形態論についての研究は、金澤 雄介 (2011)『サルデーニャ語動詞形態論の通時的研究』として出版した。

(2) 形態論の通時的変化についての研究を進めるうちに、形態論の領域だけでは捉えきれない文法現象が観察され、形態論と統語論の相互作用、すなわち形態統語論からのアプローチを試みる必要性を認識した。統語論の観点を含めたアプローチをおこなうには、これまでの形態論研究で明らかにした、個々の語の文法特徴を、語と語の間の関係という見方から捉え直すことが必要である。

２．研究の目的

本研究では、古サルデーニャ語（11～15 世紀）から現代サルデーニャ語にいたるまでの形態統語論の通時的変化について、以下に挙げるトピックを扱う。本研究課題の申請当時の目的は以下の通りである。

(1) クリティック（接語代名詞）の出現位置
古サルデーニャ語における、動詞の項としてのクリティックの出現位置についてはこれまで、Tobler-Mussafia の法則（クリティックは文頭に現れることができず、文の第 2 位置に現れ、先行するアクセントのある語をホストとする）によって説明されてきたが、例外もある。このような例外に対して Virdis (2002): “La sintassi nelle Carte Volgari Cagliaritane” は、統語構造・情報構造を視野に入れた考察を試みているが、そこでは島南部で話されるカンピダーノ方言のみが扱われている。本研究では、島北部で話されるログドーロ方言も対象とし、クリティックの出現位置について体系的記述を試みる。またスペイン語との言語接触にともなうクリティックの形態的変容（与格代名詞における se への置き換えなど）についても分析をおこなう。

⑵ 助動詞における形態変化
サルデーニャ語では、áere「持つ」が条件法の助動詞として用いられる場合、主動詞として用いられる場合とは異なる形式となる。助動詞としての áere では音韻的に縮約が生じ、語彙的意味が消失していることから、文法化が生じていると捉えられる。本研究では文献に現れる語形を年代ごとに分析し、文法化の段階をたどることで、助動詞における形態変化の過程を明らかにする。

⑶ 人称不定詞の起源と消失について
古サルデーニャ語には、人称不定詞（不定詞が人称によって活用し、主語代名詞をともなう）が見られる。本研究では、人称不定詞の起源について、形態的に類似しているラテン語の接続法半過去との関連から考察をおこなう。また、現代サルデーニャ語において人称不定詞が消失した要因について、機能的観点から分析を試みる。

⑷ 語順
⑴ に挙げたトピックと関連付けて、古サルデーニャ語における語順の問題について、「動詞第 2 位置の規則」の消失や左方移動を中心に、統語構造の再解釈、および言語接触の観点から考察をおこなう。

研究を推進するにあたり、古サルデーニャ語の写本の画像、および申請者自身が作成した古サルデーニャ語文献の電子コーパスを用い、実証的かつ網羅的な成果を提出することを目指す。

３．研究の方法

本研究では、古サルデーニャ語から現代サルデーニャ語にいたるまでの動詞の形態統語論の通時的変化について、古サルデーニャ語の写本の画像、古サルデーニャ語文献の電子コーパスを用いて、より実証的な立場から考察を試みた。本研究で使用した主な古サルデーニャ語文献は、以下の通りである：⑴ *Condaghe di San Pietro di Silki*（ログドーロ方言；12 世紀前半）、⑵ *Condaghe di San Nicola di Trullas*（ログドーロ方言；1130 年～13 世紀）、⑶ *Carte Volgari*（カンピダーノ方言；1070 年～1226 年）。

⑴ 動詞の形態統語論の通時的変化における内的要因
サルデーニャ語におけるクリティックの出現位置の通時的変化については、内的要因、すなわち統語構造における再解釈という観点から考察をおこなった。またこの問題と関連して、サルデーニャ語における語順の変化について、「動詞第 2 位置の規則」や左方移動などの現象と関連付けて、多角的な見方から解明を試みた。

⑵ 動詞の形態統語論の通時的変化における外的要因
サルデーニャ語には、11 世紀におけるピサ王国の支配によるイタリア語（トスカーナ方言）の影響と、14 世紀から 17 世紀におけるアラゴン・スペイン両王国の統治によるスペイン語とカタルーニャ語の影響が観察される。本研究では、これらの外国語との接触によってサルデーニャ語にどのような変化が生じたかという問題について明らかにした。例えば Wagner (1938-1939): “Flessione nominale e verbale del sardo antico e moderno” では、クリティックの結合における与格代名詞の se への置き換えは、スペイン語の影響によると述べられているが、このような見方の妥当性について検討した。

⑶ 他のロマンス諸語における、並行する現象の分析
本研究では、他のロマンス諸語における動詞の形態統語論の通時的変化についても考察した。同系言語において生じた通時的変化の実例に、サルデーニャ語における当該の現象について解明する手がかりが存在する可能性があるからである。とりわけ、南イタリア方言におけるクリティックの位置と語順については重点的に考察をおこなった。

⑷ 資料の収集
25 年度の 3 月に、サルデーニャ島のカリアリ大学図書館に赴き、古サルデーニャ語文献 *Condaghe di San Pietro di Sorres* の写本の画像、および本研究に関連する論文のコピーを入手した。また、他のロマンス諸語を視野に入れた分析に向けて、ナポリにて古ナポリ方言の資料及び関連論文の収集をおこなった。

４．研究成果
⑴ クリティックの出現位置について
Condaghe di San Pietro di Silki（12 世紀）などを資料として、古サルデーニャ語におけるクリティックの出現位置の記述、および現代サルデーニャ語にいたるまでのクリティックの出現位置の変化について考察をおこなった。具体的には、Tobler-Mussafia (TM) の法則の「改訂版」によって、古サルデーニャ語の定動詞節のクリティック位置の体系的な記述を試みた。
　さらに、古サルデーニャ語には現代サルデーニャ語と同じ位置に現れるクリティックがあることに対して、古サルデーニャ語では TM の法則の消失がすでに開始していたと考え、クリティックの位置の通時的変化について基礎的な考察を加えた。具体的には、クリティックの出現位置の規則は Wanner (1996) “Second Position Clitics in Medieval Romance” が主張するように、「第１要素への接合」から「動詞への接合」への変化、そしてプロクリティックが許容される環境の拡大によって説明できることを指摘した。

⑵ クリティックの重複について
いくつかのロマンス諸語では、基本語順の文、つまり直接／間接目的語が動詞の項の位置に置かれるとき、その目的語をクリティックが同一の文中で先取りすること、すなわち「クリティックの重複」が可能である。本研究では、⑴ で述べた研究成果を発展させる形で、古サルデーニャ語文献 *Carte Volgari* (1070-1226) を資料として、クリティックの重複が生じる諸条件について記述を試みた。
　先行研究では、クリティックの重複の有無は目的語の意味的特徴に依存すると考えられてきた。すなわち、目的語が［＋有生］あるいは［＋定］によって特徴づけられるとき、重複が生じるというのが一般的な見方であった。しかしながら、古サルデーニャ語では、上記の 2 つの特徴を持っていないにも関わらず、重複が生じる例が存在する。そこで本研究では、古サルデーニャ語におけるクリティックの重複について、(a) Clitic Left Dislocation (左方移動構文)、(b) [＋有生] あるいは［＋定］によって特徴づけられる直接目的語に付加される対格前置詞 a との関連、(c) 情報構造の 3 点を視野に入れた考察をおこなった。
　考察の結果、クリティックの重複は、目的語の意味的特徴よりも、目的語のトピック性に大きく関連していることを主張した。また、対格前置詞 a が付加されない直接目的語においてもクリティックの重複が観察されることを示した。
　加えて本研究では、古サルデーニャ語におけるクリティックの重複は、純粋に一致の機能のみを担っているのではなく、トピック性の表示という談話的な機能を保持していることから、文法化の過程の中途段階にあるという可能性を示唆した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２　件）

① KANAZAWA Yusuke 2014. “A preliminary study on the position of clitics in Old Sardinian”『滋賀短期大学研究紀要』第 39 号 pp.87-100.（査読無）

② KANAZAWA Yusuke（印刷中）“Mutamenti fonologici e *Stress-to-Weight* nel sardo e nell’italiano standard: un’analisi nel quadro della Teoria dell’Ottimalità” Reiner, Franz / Michela Russo / Fernando Sánchez Miret (ed.) Actes du XXVIIe Congrès international de linguistique et de philologie romanes. Nancy, ATILF.（査読有）

〔学会発表〕（計　1　件）
① KANAZAWA Yusuke 2014. “Raddoppiamento clitico nel sardo antico” La lingua e la letteratura italiana in prospettiva sincronica e diacronica. 於　クライヨーヴァ大学・ルーマニア（査読有）

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
金澤 雄介（KANAZAWA, Yusuke）
滋賀短期大学　ビジネスコミュニケーション学科　講師

研究者番号：70713288

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：